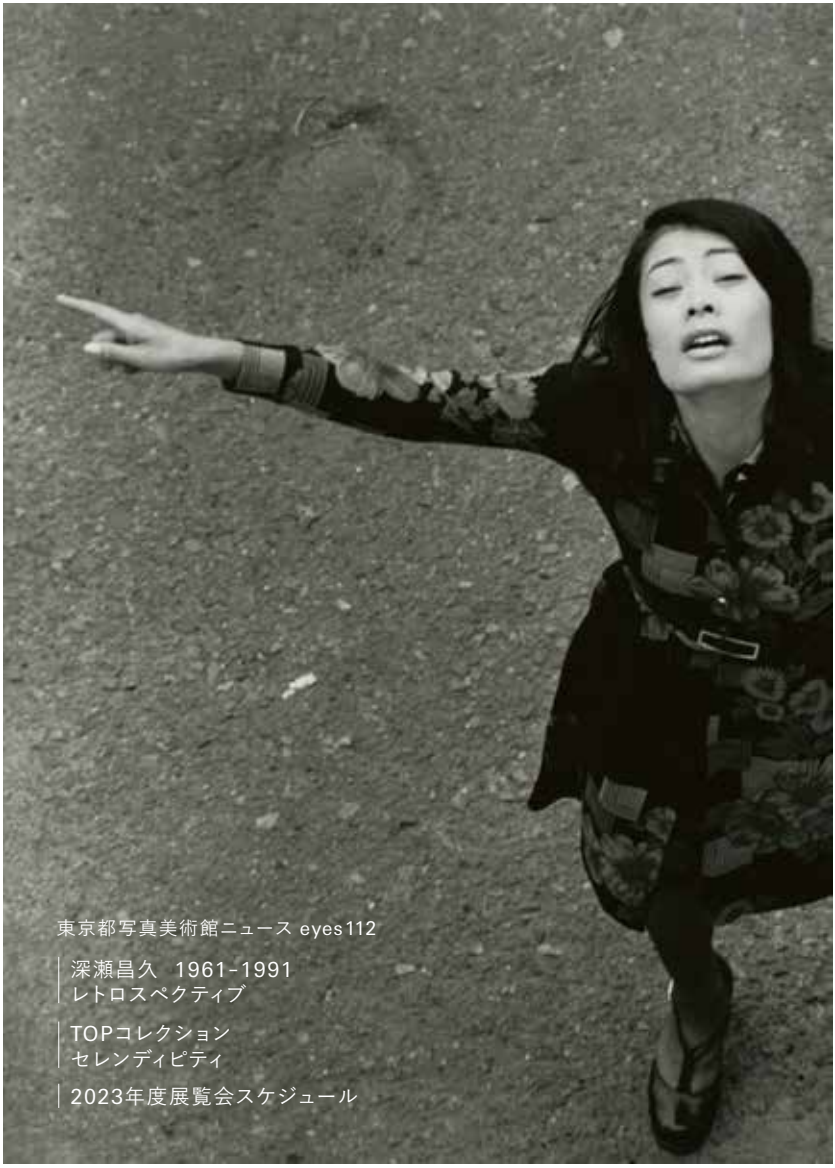
TOP MUSEUM



東京都写真美術館ニュース eyes112

深瀬昌久　1961–1991
レトロスペクティブ

TOPコレクション
セレンディピティ

2023年度展覧会スケジュール

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2023 Vol.112

INTERVIEW

深瀬昌久 1961–1991 レトロスペクティブ

Masahisa Fukase 1961–1991 Retrospective

編集者・大田通貴インタビュー

写真家・深瀬昌久の代名詞ともいえる写真集『鴉（からす）』を世に送り出した、編集者・大田通貴（おおたみちたか）さんに、写真集制作の背景や深瀬昌久の人物像についてお話を伺いました。

『鴉』（1986年 蒼穹舎発行）

── 大田さんがこれまで編集した写真集は200冊以上。『鴉』はその最初の1冊です。大田さんは高校時代からカメラ雑誌で写真作品を見るようになったとのことですが、その当時の深瀬さんは大田さんにとってどういう位置づけだったんでしょうか。

僕が好きだったのは森山（大道）[*1]さん、北井（一夫）[*2]さん、柳沢（信）[*3]さん。圧倒的にその三人。深瀬さんの写真はわからなかったですね。僕が高校生だった頃はまだ『鴉』以前の『遊戯』[*4]やヌード写真だったので、面白かったけど自分の世界じゃないと思っていました。

── 『鴉』をつくったときも、深瀬さんのドロドロした部分がピンとこないから、そっけない作りにしたかったとか。

上澄みですね。一番綺麗なところ、ピュアなところだけすーっと掬う、みたいなことをしたかったんです。

── 『鴉』を写真集にしようとしたきっかけは、「写真時代」[*5]に長谷川明[*6]さんが書いた、深瀬昌久の『鴉』を出版する出版社はないのか、という文章だったそうですね。その呼びかけに、当時は会社員だった大田さんが手を上げるかたちになった。深瀬さんにはすでに『遊戯』と『洋子』[*7]という2冊の写真集が出ていましたが、写真集を作る出版社はなかったんでしょうか。

なかったですね。『鴉』が出たのが1986年。つくろうと思ったのは84年ですが、僕が深瀬さんの写真集をつくるというと「なんであんな古い人に興味持つんだ」という雰囲気でした。70年代にデビューした作家たちから見れば、深瀬さんや森山さんは「古い人」だったんです。

── でも大田さんには『鴉』がピンと来た。

80年代に「カメラ毎日」でたまに10ページくらい「鴉」が載っていたんです。それはすごく“わかった”んです。なぜかというと北海道が写っていて、僕の原風景も北海道だから。深瀬さんの北海道への思い入れが伝わって来て、「鴉」だったらできるんじゃないかと勝手に思ったんです。しかも深瀬さんの実家は北海道でも札幌などの大都市ではなく美深（びふか）。うちは釧路の郊外がルーツだから、なんていうかな、“匂い”が同じだった。

── そして、大田さんが以前から交流があった金子隆一[*8]さんの紹介で長谷川さんと出会い、実現に向けて動き出すわけですね。

長谷川さんが深瀬さんに引き合わせてくれて、深瀬さんは何の躊躇もなく「じゃあ、金を持ってきたらやろう」。『洋子』が長谷川さんの編集だったから、長谷川が連れてきた人間なら俺は信じる、みたいな感じでした。長谷川さんは深瀬さんと荒木さんにとくに好かれていましたね。

長谷川明との共同編集

── それから約一年かけて写真集をつくる

大田 通貴（おおた・みちたか）

編集者・蒼穹舎（そうきゅうしゃ）代表。
1956年生まれ。1986年「蒼穹舎」を設立し、深瀬昌久『鴉』を世に送り出す。その後、現在まで出版、書店、ギャラリー運営を行っている。森山大道、北井一夫、石内都、山内道雄をはじめ、写真集・関連書籍等300冊弱の編集を手掛ける。2008年日本写真協会賞文化振興賞を受賞。

註

1.森山大道（1938–）／写真家。写真集に『狩人』『写真よさようなら』など。蒼穹舎からは『仲治への旅』のほか『水の夢』『宅野』『1980年代 余話』などが刊行されている。

2.北井一夫（1944–）／写真家。写真集に『抵抗』『村へ』『フナバシストーリー』など。蒼穹舎からは深瀬、森山に続き、3人目の写真集として『いつか見た風景』が刊行されている。

3.柳沢信（1936–2008）／写真家。1958年から90年代まで写真作品を発表。写真集に『都市の軌跡』『写真』。roshin booksから刊行された『Untitled』は大田が編集を手掛けた。

4.『遊戯』／「豚を殺せ」などの初期作品を収録。1971に中央公論社より「映像の現代」の1冊として刊行された。編集は「カメラ毎日」の写真編集者、山岸章二。

5.「写真時代」／白夜書房から刊行されていた写真雑誌。末井昭が編集長を務め1981年創刊。荒木経惟を中心に、森山大道など写真作家の作品を掲載。1988年廃刊。

6.長谷川明（1949–2014）／編集者、評論家。朝日ソノラマで「ソノラマ写真選書」を担当し、深瀬昌久の『洋子』のほか、荒木経惟らの写真集を手掛ける。著書に『写真を見る眼』ほか。

7.『洋子』／朝日ソノラマより「ソノラマ写真選書」の1冊として1978年に刊行。1976年に結婚した妻、洋子をモデルにした作品。鴉が象徴的なモティーフとなっている。

8.金子隆一（1948–2021）／写真史家、写真評論家、キュレーター。東京都写真美術館専門調査員としても活動し、展覧会の企画多数。著書に『日本は写真集の国である』ほか。

資金、250万円を貯めて、写真集制作が動き出したわけですね。

深瀬さんのところに行ったら、ダンボール箱いっぱいに、1,000枚以上あるんじゃないかという量の写真が出てきた。そこでまず僕が選びました。選ぶのにたくさん時間をかけた記憶はないんです。量からいって一日で選べるわけないんだけど、どうやったのかまでは覚えてないですね。量が多いから持って帰れなかったし、その場で選んだはずなんですが。

── 作家の目の前で選ぶってすごいプレッシャーだと思うのですが。

全然。勝手な自信がありました(笑)。でもまったく初めてだからできたということもあるかもしれない。自分の北海道写真集にしちゃおうと思ったんです。僕が選んだのを見て、長谷川さんがつなぎの写真を選んだ。自分の編集ができる形に足したんでしょう。僕の選んだ写真を軸に流れ作って、そこに杭打ちみたいに写真を足していった。アンコウと猫を僕が選んで、ヌードの女性を長谷川さんが選んで真ん中に入れる、とか。

── あの3カットはすごく印象に残ります。大田さんにとって写真集をつくるのは初めて。そこで長谷川さんの力を借りたということですね。

選ぶのは感性ですが、並べるのは職人技。いきなり写真の流れをつくることはできないですよ。

── 経験ですか。

何回もやらないと難しいですね。できたと思っても、それがパターンに見えてきて、ほかの人の意見を聞いたりしたこともあります。自然にできちゃうようになったのって、150冊くらいつくってからですね。

── 大田さんは蒼穹舎を立ち上げるまでどんな写真集を見てきたんですか。

日本のものでは写真作家のものですね。鈴木清[*9]さんや牛腸茂雄[*10]さんから直接買ったりしていました。大手出版社から出る企画ものの写真集は、なんでこんなにつまらないものを出すんだろうと思っていた。

あとはアメリカの写真集。リー・フリードランダーの私家版とか。アメリカの写真集って片ページにだけ写真があるものが多いですよね。いい写真を1枚1枚単独で見ていました。だから流れのことはあまり考えて見ていなかったんだと思います。アメリカとかイギリス、ドイツの写真集みたいにポンポンと日本の写真家の写真を見せたら面白いんじゃないか。しかもアメリカの写真集ってデザインが主張しない。クロス装にタイトルだけとか。カバーもただ白いだけとか。それでいいと思っていましたね。

── 写真集についてイメージを持っていた大田さんが、深瀬さんという写真家に出会った。

偶然ですけどね。深瀬さんをやっておけば、1冊で潰れても蒼穹舎という名前は残るだろうと思いましたね。それくらいすごい写真集になるという確信があったんです。

(インタビュー・構成　タカザワケンジ)

《金沢》〈鳥(鴉)〉より 1978年 日本大学芸術学部蔵

深瀬昌久
Masahisa Fukase

1934年北海道生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。日本デザインセンターや河出書房新社などでの勤務を経て、1968年に独立。1960年代初期よりカメラ雑誌を中心に写真作品を多数発表。1974年、米・ニューヨーク近代美術館で開催された企画展「New Japanese Photography」を皮切りに、世界各国の展覧会に多数出品。代表作に〈遊戯〉〈洋子〉〈烏/鴉〉〈家族〉〈サスケ〉などがある。1977年第2回伊奈信男賞、1992年第8回東川賞特別賞など受賞。2012年没、享年78。

本インタビューは当館公式ウェブサイト「深瀬昌久 1961-1991 レトロスペクティブ」展ページにて追補版を公開いたします。

《上段左から妻・洋子、弟・了暉、父・助造、妹の夫・大光寺久、下段左から弟の妻・明子と妹の長男・学、母・みつゑと弟の長女・今日子、妹・可南子、弟の長男・卓也》〈家族〉より 1971年 東京都写真美術館蔵

《美深町》〈私景〉より 1989年 東京都写真美術館蔵

註

9.鈴木清(1943-2000)／写真家。自身の手によるダミーブックを元に私家版写真集を制作。近年評価が高まっている。写真集に『流れの歌』『天幕の街』『夢の走り』『修羅の圏』など。

10.牛腸茂雄(1946-1983)／写真家。写真集に『Self and Others』『見慣れた街の中で』など。2022年に『牛腸茂雄全集 作品編』が刊行された。

深瀬昌久 1961–1991 レトロスペクティブ

Masahisa Fukase 1961–1991 Retrospective

2F 2023.3.3|金| – 6.4|日|

このたび東京都写真美術館では「深瀬昌久 1961–1991 レトロスペクティブ」展を開催します。深瀬昌久は自身の私生活を深く見つめる視点によって、1960年代以降の日本の写真史のなかで独自のポジションを築きました。それは写真の原点を求めようとする行為でもあり、のちに「私写真」と呼ばれ、写真家たちが向かった主要な表現のひとつとして展開していきます。

深瀬は妻や家族など、身近な存在にカメラを向け、自身のプライベートを晒しながら、自己の内面に潜む狂気に意識を向けていきます。その狂気は、被写体に対する愛ある眼差しと、ユーモラスな軽やかさが混在し、深瀬作品を特別で唯一無二なものにしています。

本展では、〈遊戯〉〈洋子〉〈烏(鴉)〉〈家族〉など、主要作品を網羅した東京都写真美術館のコレクションに加え、《無題(窓から)》〈洋子〉、日本大学芸術学部が1980年代初頭に収蔵した〈烏(鴉)〉個人所蔵の〈ブクブク〉〈サスケ〉ほか、充実した作品群によって構成します。1960年代から90年代の初頭に活躍した深瀬昌久の軌跡を辿り、彼独自の世界に触れる機会とします。

《無題(窓から)》〈洋子〉より 1973年

《屠、芝浦》〈遊戯〉より 1963年 東京都写真美術館蔵

展示構成[全8章]

1章 | 遊 戯	2章 | 洋 子	3章 | 家 族
4章 | 烏(鴉)	5章 | サスケ	6章 | 歩く眼
7章 | 私 景	8章 | ブクブク	

出品作品点数　計117点(そのほか、雑誌等資料)

表紙)《無題(窓から)》〈洋子〉より 1973年
表紙、P1–5の図版はすべて ©深瀬昌久アーカイブス

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
[協賛] 東京都写真美術館支援会員
[協力] 深瀬昌久アーカイブス

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

TOPコレクション セレンディピティ

日常のなかの予期せぬ素敵な発見

TOP Collection: Serendipity – Wondrous Discoveries in Daily Life

3F 2023.4.7|金| – 7.9|日|

奈良美智《NY Drawing (left); Yogyakarta Cat (right)》〈days 2003–2012〉より 2003–2012年
東京都写真美術館蔵 ©Yoshitomo Nara

「セレンディピティ」という言葉があります。「セレンディップの三人の王子」というペルシアのおとぎ話を由来とするこの言葉は、「偶然と才気によって、予期しない発見をすること」という意味があります。

たとえば、こんな経験はないでしょうか。偶然見つけたポストカードの写真に心が動いたり癒やされて、壁に貼っておいたり、大切に手帳にはさんでとっておいたり。あるいは、撮りためたたくさんの写真を見返してみたら、そのうちの2枚が撮影した場所や時間を越えてつながって、それまで気づかなかった何かを発見したり。それはまさしくセレンディピティの産物といえるでしょう。

本展覧会では、3万7千点以上に及ぶ当館の収蔵作品のなかから、セレンディピティをキーワードに、ありふれた日常の何気ない一瞬を撮影した作品などを見ていきながら、写真家に訪れたささやかな心の機微を探ります。そしてまた、展覧会を見るという行為自体も、予期しない出来事との出会いにあふれた、セレンディピティな体験です。

何年も続く制限された日々のなかで、様々な辛い出来事や不都合な出来事をたくさん経験してきた私たちですが、こうした写真家の視点をヒントに、セレンディピティの産物としての癒やしや心の豊かさを回復する種を見つけることができるかもしれません。

齋藤陽道〈感動〉より 2011年

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。
[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

しずかな視線、満たされる時間

私たちはこの数年、それまでとは全く違った日常を送ることを余儀なくされました。そしてまたそれは、日常とは異なる世界を求めて旅に出ることが自由にできない生活でもありました。

しかし、日常というありふれた世界も、ちょっと視点を変えてみれば、様々な気づきにあふれています。ずっと前からすぐそこにあったのに気づかなかったことの発見は、まさしくセレンディピティな現象として、予期しないタイミングで私たちに訪れます。こうした発見が、この数年の狭まった世界の中での私たちの暮らしを、ただ閉ざされたものではない、これまでとは異なる豊かさのあるものにしているのではないでしょうか。

このセクションでは、作家たちが、世界を切り取ることによって表現する写真というメディアを使って、日常のなかのささやかな発見を捉えた作品を紹介します。こうした作品を見ると、それぞれの発見は作家たちに幸せや満ち足りた気持ちをもたらしていることに気づくでしょう。

牛腸茂雄〈日々〉より 1967-1970年

出品作家：吉野英理香、牛腸茂雄、北井一夫、島尾伸三、潮田登久子、今井智己

ふたつの写真を編みなおす

中平卓馬〈日常〉より 1990-1996年

心の中で起きるささやかな衝動により、写真家はそのときどきにシャッターを押し、世界を切り取っていきます。そしてその結果膨大な数となった写真のなかから、作品を発表するにあたり作家たちは取捨選択をせねばなりません。その作業の際に、撮影した場所や時間を越えて2つの写真が、彼らが全く予期していなかった何かの関係性によって結ばれることがあります。それはまさしくセレンディピティの産物といえるでしょう。写真は、編みなおされることにより、それぞれを別に見た時の意味に加えて、2つが並ぶことで生まれるまた別の意味を帯び、作品としての豊かさを増していきます。

また、それぞれの写真の関係性を想像することによって、鑑賞者は作家の思考に触れることができるかもしれません。

出品作家：奈良美智、齋藤陽道、中平卓馬、エリオット・アーウィット

ただそこにあるものを写す

「最古の現存写真」とされるニセフォール・ニエプスの《ル・グラの窓からの眺め》は、ニエプスの実験室の窓から外の風景を写したものです。ですが、暗い箱の中に映る像を何かの形で定着させて記録しようと実験していたニエプスにとっては、窓の外の風景を写したかったのではなく、「ただ写すという行為」自体がその目的だったと言えるでしょう。ですが、このたまたま写った窓外の風景は、「世界最古の写真」として、現在もなお世界中で愛されています。偶然写った窓外の風景に、セレンディピティの力によって現在でも多くの人々が何かを発見しているのでしょう。

ひとつのイメージを目の前にすると、私たちはそこに何かを見出し、そして見た人によってはとても大切な意味を持つことがあります。このセクションでは、作家たちが「ただ、そこにあるものを写しとる」という行為によって得られたイメージが、それを鑑賞する人におこすセレンディピティについて考えてみます。

作品に写るイメージ、ただそのまま見るという見方もあれば、イメージから記憶や想像を解きほぐし自分だけの「なにか」に出会ったり、気づいたりすることもあるかもしれません。

鈴木のぞみ《柿の木荘2階東の窓》〈Other Days, Other Eyes〉より 2016年

出品作家：鈴木のぞみ、佐内正史、葛西秀樹、エドワード・マイブリッジ、山崎博、浜田涼、相川勝

作品にまつわるセレンディピティ

優れた作品を生み出す作家たちも、みな私たちと同じように日々を生き、毎日を暮らしています。そんな日常のなかでセレンディピティが訪れ、作品制作のきっかけになることもあります。

本城直季は写真を学んでいる学生時代に、たまたま大判カメラを手に取ってみたらしっくりなじむ感覚を感じ、様々な撮影方法を試しているときに、現在の作品のような表現方法に出会いました。井上佐由紀は、祖父の瞳を撮影したことをきっかけに、生まれたばかりの乳児の瞳の作品を撮り始めました。

また、作品を鑑賞するうちに、私たちに思いがけない発見が訪れることもあります。畠山直哉の作品は、見えているものの認識の仕方について自覚的になりつつ見続けていくと、写真にまつわる様々な仕組みに思い至るでしょう。

本城直季《東京 日本 2005》〈small planet〉より 2005年

出品作家：本城直季、井上佐由紀、石川直樹、ホンマタカシ、畠山直哉

関連イベント

会期中に作家によるトーク、対談、学芸員によるギャラリートーク、対話型鑑賞会などを開催する予定です。最新情報は当館ホームページをご参照ください。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

2023 年度 SCHEDULE

東京都写真美術館展覧会スケジュール

東京都写真美術館で、2023年3月〜2024年3月に開催する展覧会ラインナップをご紹介いたします。国内外で活躍する作家の個展や、当館珠玉の名作コレクション、新進作家によるグループ展など、1年を通じてさまざまな作品との出会いをお楽しみください。

㊀企画展　㊁収蔵展　㊂誘致展

年間パスポートの特典は、企画展、収蔵展、誘致展で異なりますので、詳細はP12をご覧ください。

展覧会の詳細や関連イベントは、決定次第、公式ホームページにアップします。公式ツイッターやインスタグラムではタイムリーな情報を発信します。

@topmuseum　topmuseum

https://www.topmuseum.jp

2023.3 » 4 5 6 7 8 9 10 11 12 2024.1 » 2 3 4

3F 展示室

恵比寿映像祭2023 コミッション・プロジェクト
2.21(火)-**3.26**(日)

TOPコレクション セレンディピティ㊁
4.7(金)-**7.9**(日)
国内外の名品から、何気ない日常を切り取った作品を紹介

1

TOPコレクション 覗き見る㊁
7.19(水)-**10.15**(日)
「覗く」ことにより得られたイメージとメディア・テクノロジーの歴史をたどる

2

日本の新進作家 vol.20㊀
10.27(金)-**2024.1.21**(日)
日本の新進気鋭の作家を発掘、紹介するグループ展

3

恵比寿映像祭 Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions

3Fのみ 3.24(日)まで開催

恵比寿映像祭2024
2.2(金)-**3.24**(日)
恵比寿を起点に展開するアートと映像のフェスティヴァル

2F 展示室

深瀬昌久　1961-1991 レトロスペクティブ㊀
3.3(金)-**6.4**(日)
60年代から日本写真の第一線で活躍した作家の〈鴉〉ほか代表作を紹介する大回顧展

巻頭特集はP1へ

4

本橋成一と ロベール・ドアノー㊀
6.16(金)-**9.24**(日)
日仏を代表する2人の写真家の、時代や地域を超えて共鳴し合う作品を展覧

5

6

ホンマタカシ㊁
10.6(金)-**2024.1.21**(日)
写真から映像まで、ホンマタカシの近作を中心に紹介

7

恵比寿映像祭2024
2.2(金)-**2.18**(日)

イメージと記憶㊀
3.1(金)-**6.9**(日)
写真・映像は、人々のどのような「記憶」を捉えようとしてきたのか。写真・映像の意味を問い直すグループ展

8

B1F 展示室

APAアワード2023㊂
2.25(土)-**3.12**(日)

土門拳の古寺巡礼㊂
3.18(土)-**5.14**(日)

田沼武能　人間讃歌㊀
6.2(金)-**7.30**(日)
ヒューマニスティックな視点で人間のドラマを描き続けてきた作家70年の軌跡

第48回2023 JPS展㊂
5.20(土)-**5.28**(日)

9

映像展 風景以降㊁
8.11(金)-**11.5**(日)
わが国の風景論の起点となった1970年代前後から現代までの写真及び映像作品を振り返る

東京工芸大学 創立100周年記念展㊂
写真から100年
11.11(土)-**12.10**(日)

プリピクテ「Human」㊂
12.15(金)-**2024.1.21**(日)

恵比寿映像祭2024
2.2(金)-**2.18**(日)

APAアワード2024㊂
2.24(土)-**3.10**(日)

アンリ・カルティエ=ブレッソン 眼の記憶㊂
3.16(土)-**5.12**(日)

1)奈良美智《NY Drawing (left); Yogyakarta Cat (right)》〈days 2003-2012〉より 2003-2012年 東京都写真美術館蔵 ©Yoshitomo Nara　2)作者不詳《(ゾートロープのトレード・カード)》19世紀　3)うつゆみこ《岡崎おうはんコンゴウインコ》2022年 ©Yumiko Utsu　4)《無題(窓から)》〈洋子〉1973年 ©深瀬昌久アーカイブス　5)本橋成一《木下サーカス 東京 二子玉川園》1980年 ©Motohashi Seiichi　6)ロベール・ドアノー《モントルイユのロマの娘、マリーヌ》1950年 ©Atelier Robert Doisneau/ Contact　7)ホンマタカシ〈THE NARCISSISTIC CITY〉より 2013年 ©Takashi Homma Courtesy of TARO NASU　8)マルヤ・ピリラ《ルス》〈インナー・ランドスケープス　トゥルク〉2011年　9)田沼武能《紙芝居を見る子ら、佃島》1955年

5月以降に始まる展覧会名はすべて仮称です。展覧会スケジュールは2023年3月現在の予定です。
事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ホームページでご確認ください。

土門拳の古寺巡礼

Domon Ken: A Pilgrimage to Ancient Temples

B1F 2023.3.18|土|－5.14|日|

日本の写真史に燦然と輝く土門拳の『古寺巡礼』(全五集)。第一集が1963年に刊行され、今年で60年を迎えます。戦前から仏像行脚を続けた土門は、みずからの眼で選んだ古寺や仏像を徹底して凝視し撮影。建築の細部や仏像の手や足、口元などをクローズアップで捉える独自の作品を発表しました。取材途中、脳出血で倒れ、車椅子生活になっても土門は不屈の精神で撮影を続けました。本展では、戦中撮影の作品も含め、カラー・モノクロの代表作約120点を展観します。

[観覧料] 一般1,100円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。
[主催] クレヴィス　[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館　[協力] 公益財団法人さかた文化財団 土門拳記念館

〈お問い合わせ〉クレヴィス 03-6427-2806　info@crevis.co.jp
〈公式サイト〉crevis.co.jp

室生寺弥勒堂 釈迦如来坐像左半面相

1F HALL / 上映

最新の
上映スケジュールは
こちら▶

1F 『目の見えない白鳥さん、アートを見にいく』

恋人とのデートがきっかけで初めて美術館を訪れた全盲の白鳥さんは、「全盲でもアートを見ることはできるのかも」と、あちこちの美術館を訪れるように。いつの間にか「自由な会話を使ったアート鑑賞」という独自の鑑賞法を編み出しました。水戸から東京、新潟、そして福島へ。アート作品をめぐりながら旅する白鳥さんと友人たち、美術館で働く人々、新たに白鳥さんと出会った人々が紡ぎ出す豊かで自由な会話。その旅路や見えない日常を追ったドキュメンタリー。

© ALPS PICTURES INC.

[上映期間] 2023.3.7(火)－3.19(日)
[休映日] 2023.3.13(月)
[料金] 一般1,800円、学生(大学・専門・高校)1,500円、シニア(60歳以上)・中学生以下(3歳以上)・障害者手帳をお持ちの方(介護者2名まで)1,200円

共同監督:三好大輔 川内有緒　製作・配給:ALPS PICTURES INC.
2022年／日本／カラー／107分／16:9／STEREO／DCP

〈お問い合わせ〉ALPS PICTURES INC.
info@alps-pictures.jp
〈公式サイト〉www.shiratoriart.jp

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

東京都写真美術館 年間パスポート

「TOPMUSEUMPASSPORT 2023」のご案内

TOP MUSEUM
PASSPORT 2023

展覧会を無料または割引でご鑑賞いただける年間パスポートを今年も**4月1日から販売いたします。**ご本人様に加えて、同伴の方1名様もご利用いただけます。ミュージアム・ショップでのお買い物も5%引きになる(一部商品を除く)など、たいへんお得なパスポートです。**有効期間は購入日から2024年3月31日まで。**早めの購入がおトクですので、ぜひこの機会にお求めください。
販売価格:3,300円(税込)

特典 1

展覧会を無料または割引でご鑑賞いただけます。

1 **収蔵展 無料**

有効期間中は何度でもご鑑賞いただけます。

2 **企画展 4回まで無料**

有効期間中お好きな企画展を4回まで無料でご鑑賞いただけます。※5回目以降は割引料金となります。

3 **誘致展 割引**

有効期間中は割引料金でご鑑賞いただけます。

4 同伴の方1名様まで無料または割引でご覧いただけます。

[収蔵展:**無料**] [企画展・誘致展:**割引**]

＊対象の展覧会は、P9－10の年間スケジュールにてご確認ください。

特典の内容は諸般の事情により変更することがございます。あらかじめご了承ください。
パスポートご利用時の注意事項は当館ホームページをご覧いただくか、1F総合受付までお問い合わせください。

特典 2

1階ホールの上映作品を割引でご鑑賞いただけます。(一部作品を除く)

※同伴の方1名様まで割引(割引の有無および割引料金は上映作品によって異なります)

特典 3

ミュージアム・ショップでのお買い物が5%引き(一部商品を除きます)

特典 4

カフェのお会計が5%引き

※同伴の方1名様まで5%引き

特典 5

(公財)東京都歴史文化財団が管理運営する下記の美術館・博物館での割引
東京都庭園美術館・江戸東京たてもの園・東京都現代美術館・東京都美術館・東京文化会館

※割引対象はご本人様のみ。割引をご利用になる際は、必ず本パスポートのご提示が必要です。

TOPMUSEUM Podcast

ゲストを迎えて展覧会をめぐる様子や、作家とゲストのオンライントーク、館内で開催したアーティスト・トークイヴェントの様子など、展覧会をより楽しめるコンテンツを配信しています。Spotify、Apple Podcast、Google Podcastsで配信していますので、ぜひ公式ポッドキャストを訪れてみてください。
東京都写真美術館ホームページの各展覧会ページからもご視聴いただけます。
エピソード #01ゲスト・トーク|塩塚モエカ × 藤村里美【アヴァンガルド勃興】(前編)

Spotify
Apple Podcast
Google Podcasts

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キヤノン(株)
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン(株)
(株)資生堂
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
ピクテ・ジャパン(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アイング(株)
アオイネオン(株)
(株)アクト・テクニカルサポート
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アフロ
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
(一財)AVCC・霞が関ナレッジスクエア(KK²)
SMBC日興証券(株)
NHK営業サービス(株)
(株)NHKエデュケーショナル
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
ENEOSホールディングス(株)
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)
カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キッコーマン(株)
(株)紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
ゲッティイメージズジャパン(株)
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣済堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三愛オブリ(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
(株)JTB
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校／東京写真学園
シャネル(同)
(株)集英社
シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーホールディングス(株)
(株)西武・プリンスホテルズワールドワイド
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
台新國際商業銀行
大成建設(株)
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
(株)髙島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタデオ
東京造形大学
東京綜合写真専門学校
(株)東京ダイケンビルサービス
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアルアーツ
(株)東京美術倶楽部
東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロンマネージメント
(株)ニコンイメージングジャパン
日油(株)
日活(株)
日機装(株)
(株)日経BP
日光ケミカルズ(株)
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
日本航空電子工業(株)
(株)日本廣告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケーションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディアパートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハーツ
パナソニックホールディングス(株)
(株)パラゴン
(株)バンダイナムコフィルムワークス
ぴあ(株)
北海道 写真の町東川町
(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
丸善雄松堂(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱電機(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート
(株)ワコール
(他1社)

支援会員の
詳細は
こちら▼

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人、(公社)=公益社団法人、(同)=合同会社、(一社)=一般社団法人
(一財)=一般財団法人

(令和5年2月現在・五十音順)

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADiff BAITEN

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。約150年前にフランスで生まれた写真印画技術によって印刷されたコロタイプ絵はがきはいかがでしょうか。階調豊かな表現で印刷された写真家の名作を、お部屋に飾ったり、大切な方へのお手紙に使ってはいかがでしょうか。

コロタイプ絵はがき　各種 275円(税込)～

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)　[TEL] 03-6447-7684
[定　休　日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F CAFE
カフェ

フロムトップ

台湾で人気の屋台飯、ルーロー飯をワンプレートでご用意しています。コラーゲンたっぷりの皮付きの豚肉にこんにゃくを加えた食感楽しいルーロー飯に色鮮やかな野菜を添えました。コーヒーまたは日本茶付き1,500円(税込)。

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-21:00 ※当面は10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730
[定　休　日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

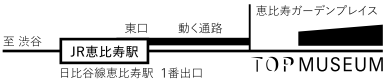
SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ ▶

	3F	2F	B1F	1F
2023 3	恵比寿映像祭2023 コミッション・プロジェクト 2.21（火）–3.26（日）	深瀬昌久　1961-1991 レトロスペクティブ 企 3.3（金）–6.4（日）	APAアワード2023 誘 2.25（土）–3.12（日） 土門拳の古寺巡礼 誘 3.18（土）–5.14（日）	『目の見えない 白鳥さん、 アートを見にいく』 3.7（火）–3.19（日）
4	TOPコレクション セレンディピティ 収 4.7（金）–7.9（日）			
5			第48回2023 JPS展 誘 5.20（土）–5.28（日）	『市民、暴力、権力、 その所有をめぐる 映画祭』 3.28（火）–4.9（日）
6		本橋成一と ロベール・ドアノー 企 6.16（金）–9.24（日）	田沼武能　人間讃歌 企 6.2（金）–7.30（日）	
7	TOPコレクション 覗き見る 収 7.19（水）–10.15（日）			
8			映像展　風景以降 収 8.11（金）–11.5（日）	
9				
10	日本の新進作家 vol.20 企 10.27（金）–2024.1.21（日）	ホンマタカシ 収 10.6（金）–2024.1.21（日）		
11			東京工芸大学 創立100周年記念展 写真から100年 誘 11.11（土）–12.10（日）	
12			プリピクテ「Human」 誘 12.15（金）–2024.1.21（日）	
2024 1				
2	恵比寿映像祭 2024 2.2（金）–2.18（日）			
3	3階展示室のみ 3.24（日）まで	イメージと記憶 企 3.1（金）–6.9（日）	APAアワード2024 誘 2.24（土）–3.10（日） アンリ・カルティエ= ブレッソン 眼の記憶 誘 3.16（土）–5.12（日）	「ぐるっとパス」 ▼詳細はこちら▼

企 企画展　収 収蔵展　誘 誘致展

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099　topmuseum.jp

開館時間　10:00–18:00（木・金は20:00まで）※入館は閉館30分前まで。
休 館 日　毎週月曜日（月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館）、年末年始、臨時休館

東京都写真美術館ニュース「アイズ2023」112号　□発行日：2023年3月1日　□企画・編集：東京都写真美術館管理課企画広報係　□印刷・製本：株式会社公栄社　□発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2023　□本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。